

## 一橋大学キャンパスの植物

2024年1月25日

1月のある作業日にふと眼にした光景があります。学内のコナラの大径木はナラ枯れ病のためかなりの本数が枯れてしまいましたが、この枯れたコナラの大径木の伐採作業です。樹木の立っている環境により、直接伐倒できない場合や高所作業車を使用してもそれができない場合には、人間が木に登り枝を落としながら切り詰めていく方法が採られます。ロープと安全装備だけを頼りに樹上で、伐採作業を行う人達を空師といいます。空師による樹木の伐採は日本の伝統的な伐採方法の一つとして培われてきたものですが、大学キャンパスにおける樹木の伐採においてもその技術が生かされています。写真の中央手前の枝を切り落とす作業を紹介しますのでご覧いただければと思います。



さて、冬場のこの時期、ツバキやサザンカを除き花を見ることは殆どありません。今回は10月以降目にした植物を題材にします。そこで草本についてはキツネノマゴ、ヤブマメ、ヒヨドリジョウゴを、樹木についてはアベリアと冬芽が目立つゴンズイとユリノキを取り上げてみます。

### 1. キツネノマゴ



キツネノマゴ科キツネノマゴ属の一年草です。路傍や空き地、田畑の畔など日当たりのよい明るい草地に普通にみられ、やや湿った環境を好みます。学内でもよく見かけますが、ひょうたん池西側の草地でふと目にとまりました。生育期は4月から10月、花期は8月から10月ですが、温暖化が進み少し伸びているのかもしれませんが。名前の由来は花が密についた花穂は深く5つに裂けた萼がよく目立ち、花後にはふさふさと小さな狐の尾のように見るとか、唇花の丸く大きな下唇が狐の顔のようとか諸説あるようです。

草丈は10から40cmで、茎には縦の稜があり短毛があります。根元はやや地面を這いよく分枝しています。葉は対生し、長さ2から4cmほどで両面に毛があります。茎先に長さ7mmほどの淡紅紫色の唇花を密につけ、下唇には白い斑紋が見られます。また、萼は深く5つに裂け、萼や苞の縁には白色の長毛があります。

薬草としての歴史は古く、刈り取って日干しにしたものを煎じて飲むと、鬱病や解熱、咳止めに良いとされ、また、入浴剤にすれば腰痛や神経痛、リュウマチに効くといわれています。葉の絞り汁は充血を抑え、気分を爽快にさせる効能もあり、中国では目薬にも利用していました。若葉は茹でて和え物やお浸しにして食べることができます。



## 2. ヤブマメ



マメ科ヤブマメ属の山地の林縁や草地など日当たりのよいところに生える一年草で、北海道から九州、朝鮮から中国に分布します。ヤブマメもひょうたん池西側の背丈のある草や灌木類の多い所で眼にしました。茎は下向きの毛が密生し、細長く伸びて他の草木にからみつき、藪で多く見られることからその名が付けました。花は長さ 2cm ほどで先が蝶のような形をし、白っぽい花びらの先は濃い紫色をしていて、葉の脇から出る花序(花茎)に数個が付きまます。葉は 3 枚が一組の三出複葉で互生です。小葉は長さ 3 から 6cm の広い卵形で毛が生えています。花が終わると鞘状の実をつけ、熟すと半分に裂けて、黒い斑点のあるウズラの卵のような種を出します。

なお、この植物は、茎の一部から地中に枝が伸びて地中にも閉鎖花を付け、土の中でも果実を稔らせます。地上部の種子は有性生殖であるので多様な性質を持っており、新たな場所へと散布されるように、一方、地下に形成した種子(1 個しかない)は、単為生殖であるので自らと同じ遺伝子を持っており、まずは来年への存続を確保するためという生活戦略を持っています。このような戦略は、来年もヤブマメが生育可能な立地条件であることが予想される場合に成り立ち、ヤブマメの生育地は来年も一年性のツル植物が生育可能な立地ということです。



## 3. ヒヨドリジョウゴ



ナス科ナス属のツル性の多年草で、北海道から沖縄まで日本全国に分布し、日当たりのよい場所を好み、林縁、山の斜面、草地などで他の樹木などに絡みついて育ちます。学内でも比較的眼にする植物ですが、東本館西側の林縁で眼にしました。

ヒヨドリジョウゴの開花は8から9月で、ナスやホオズキに似た直径5mm ほどの五弁花が、花柄の先端で下向きに咲きます。花弁は淡い紫を帯びた白で、開くと後ろに反り返ります。5本ある雄蕊は合体するように雌蕊を取り囲み、黄色い葯が目立ちます。花の後にできる果実は直径8mm ほどで、小さな球形で、緑から赤に熟し、赤い果実がヒヨドリの好物であることからヒヨドリジョウゴと名付けられました。ヒヨドリジョウゴの葉は互生で、上部にある葉は卵形ですが、中間より下にある葉は3から5つに裂けています。茎は細長く、茎や葉には柔らかい毛が密生しています。

ヒヨドリジョウゴの茎葉を長寿を保つ上質な薬草としていますが、全草にジャガイモ(ナス科)の芽と同じソラニンという毒性物質を含み、果実などを誤って食べると嘔吐、下痢、腹痛、胃炎、呼吸困難を招き、最悪の場合は命に関



わることがあります。漢名を「白英」または「穀菜」といい、民間療法では食酢に漬けた茎葉を帯状疱疹の外用薬に、煎じたものを解毒、解熱、利尿促進に使用します。(写真円内:ヒヨドリジョウゴの花と実)

#### 4. アベリア



スイカズラ科ツクバネウツギ属の総称。日本ではシナツクバネウツギの園芸品種をアベリアということが多く、日本へ渡来したのは大正時代末期で、花期が長く、丈夫な性質を持つことから、東京オリンピック以後の緑化ブームを契機に全国へ広まったといわれます。現在でも多くの街路や公共の緑地、生垣や植え込みに植栽されていますが、学内でも図書館時計台棟の南側などに植えられています。

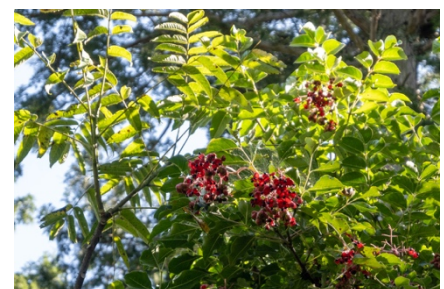
葉は直径1から3cmの卵形で先端が尖り、表面は油っぽい光沢があり、枝の一節から2～4枚が生じる輪生あるいは対生で、場所や環境によってその枚数は異なります。葉の表面は濃緑色で、若い枝は光沢のある紅色で細かな毛がありません。樹齢を重ねると樹皮は灰褐色となり、薄く剥がれ落ち、太い茎の内部はウツギと同様に空っぽです。樹形は株立ち状で細い茎が乱立して先端は枝垂れるのが特徴です。



花期は初夏から霜が降り始める晩秋まで、長さ2cmほどのラッパ型をした花が次々に咲きます。花冠は白で五つに裂け、筒状の部分が紅色となるため遠目には全体が淡いピンク色に見えます。アベリアに種子ができるのは稀であり、繁殖は挿し木や株分けによります。仲間の山に生えるツクバネウツギの写真も左に掲載しましたので比較してみてください。

#### 5. ゴンズイ

ミツバウツギ科ゴンズイ属の小高木で、関東地方以西から九州の日当たりのよい、やや乾燥した雑木林の林縁に生えています。学内でも時々眼にし、今回は1月の作業中に冬芽をつけた幼樹を眼にしたので取り上げました。高さは3から8mになり、白褐色の皮目が縦縞状に見え、この模様が、ナマズ科の魚のゴンズイが群れているのに似ていることからゴンズイと名付けられたといわれています。



本年枝は緑褐色ないしは褐紫色で、白い縦長の皮目が目立ちます。写真の冬芽は頂芽がありますが、主に仮頂芽からでて、側芽からはあまりでないので枝の数は少なく、冬には赤くなります。葉は対生で、長さ10から30cmの奇数羽状複葉で2から5対の小葉があります。小葉の先はとがり、縁には芒状の鋸歯があり、表面は濃緑色でやや光沢があり、裏面の脈上には毛があるのが特徴です。花は、本年枝の先に長さ15から20cmの円錐花序をだし、淡黄緑色の小さな花を多数つけ、花弁と萼片は5個、ほぼ同形で、ともに平開しません。



雄薬は 5 個。雌薬は 1 個、柱頭は 3 つに裂け、雄薬と雌薬はほぼ同長です。果実は袋果で長さ 1cm ほどの半月形をしていて、果皮は肉質で厚く、9-11 月に赤く熟し、熟すと裂開し、光沢のある黒い種子が 1-2 個顔を出します。花期は 5 から 6 月。冬芽は、枝先に普通仮頂芽が 2 個つきますが、1 個又は 2 対つくこともあります。仮頂芽は長さ 4 から 7mm。芽鱗は 2-4 個、赤色で無毛、葉

痕は半円形-円形で維管束痕は 9 個あります。

## 6. ユリノキ



モクレン科ユリノキ属の落葉広葉高木で、学名は *Liriodendron tulipifera* です。北アメリカ東部原産で明治初期に渡来し、日本での自生はありません。花の形は、ユリというよりはチューリップに似ています。渡来当時は、種名: *tulipifera* 由来のチューリップも日本では珍しかったため、ギリシャ語由来の属名: *Liriodendron* に因み「ユリ」とよばれるようになりました。原産地では樹高が 60m にもなるものがあり、日本でも街路樹や公園に多く植えられています。学内ではひょうたん池の南側に大きな木があり、正門に入って右手にも見ることができます。



葉は互生し、葉身は 6 から 15cm で、裨纏に似た形に 4 から 6 つに裂け、主脈の先端が、裂片の凹部になるのが特徴です。この葉の形から、ヤッコダコノキ、グンバイノキとも言われています。花は上を向き、ほぼ水平に開き、5 から 6 月に黄緑色の花を枝の先端に付けます。花弁は 6 枚で基部に橙赤色の斑紋があり、果実は集合果で、一つの花に約 100 個の実がなり、一つ一つの実は翼果で、扁平の翼状になってマツカサ状に集まり、直立するのが特徴です。一つの実は細長い楕円形の翼があり、果軸につながる基部に

種子があり、種子の重みで基部を中心に回転しながら飛び、母樹から遠くに落下することができます。



秋には黄葉し、冬芽は長楕円形ないしは楕円形で先が尖っています。芽鱗は 2 枚で、頂芽が側芽より大きくなり、枝を一周する折葉痕および芽鱗痕が多数残るのが特徴です。

一橋植樹会会長 飯塚義則(昭 50 経)

参考文献: 山溪ハンディ図鑑: 『山に咲く花』、同 3: 『樹に咲く花』、同 4: 『樹に咲く花』、また、ヒヨドリジョウゴ、ゴンズイ、ユリノキの花は手持ちの写真がなく、それぞれ各図鑑より引用しました。